うつぐみの島で

イチ、ニ、サン、ヨン。そこまで口にして、数えるのをやめた。

牛、うし、ウシ。ひたすら草を食べているものもいれば、目をつぶって休んでいるものもいる。見渡す限り、牛がいた。

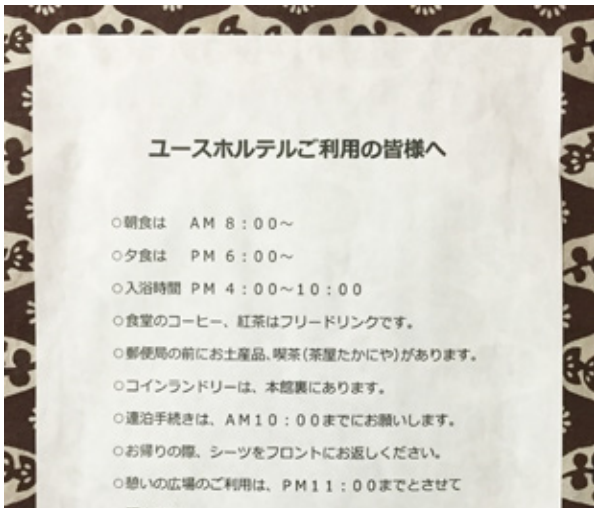
７月下旬、僕は２泊３日の旅程で、沖縄・竹富島を訪ねた。中学２年の甥、タツヤ（１３）と男２人旅。羽田空港から直行便で２時間５０分かけて石垣空港へ飛び、石垣港から船で１５分。竹富島は、東京から直線距離で約２千キロ南西にある。日常を忘れさせてくれるには、十分な距離だ。

到着したのは夕方だった。港から牛を眺めつつ、デイゴの木が並ぶ道を南に行く。道中には、生まれたばかりのヤギ。５頭いるのに、名は、みな「ビスケ」。１から５と、ナンバリングされているらしい。真っ黒に日焼けした飼い主の男性が、くたびれたタオルで汗をふきながら言う。「名前つけるの、面倒でさ」。それでも、ビスケ“たち”を見つめる目は優しく、口角はかすかに上がっていた。

周囲９．２キロの竹富島には、３６０人が暮らす。小中学校はそれぞれ一つずつあり、児童・生徒は計４０人。そんな小さな島に、昨年１年間で過去最高の５２万人の観光客が訪れた。燦々と照りつける太陽、真っ青な空、白い砂浜、透明度の高い海……。魅力をあげれば、きりがない。学校の庭先で、かりゆし姿で花に水やりをする先生たちを見るだけで、深く実感する。「ああ、遠くへきたんだ」と。

僕らが宿泊先に選んだのは「ユースホステル（ＹＨ）高那旅館」。７０年近くの歴史があり、竹富島で最も古い宿だ。司馬遼太郎の『街道をゆく』にも登場する。日本最南端のＹＨは２階に併設されていて、会員なら１泊３千円の安さ。６畳一間に布団と扇風機だけが置かれ、エアコンをつけるのには１時間１００円かかる。

部屋の壁には、ハイビスカスの花の絵が添えられた貼り紙があった。「ユースホルテルご利用の皆様へ」。ん？　ちょっと待てよ。「ユースホルテル」？　ホルテル？　タツヤと２人、思わず笑った。



ユースホルテルご利用の皆様へ

○朝食は　AM ８：００～
○夕食は　PM ６：００～
○入浴時間 PM ４：００～１０：００
○食堂のコーヒー、紅茶はフリードリンクです。
○郵便局の前にお土産品、喫茶（茶屋たかにや）があります。
○コインランドリーは、本館裏にあります。
○連泊手続きは、AM１０：００までにお願いします。
○お帰りの際、シーツをフロントにお返しください。
○憩いの広場のご利用は、PM１１：００までとさせて

Copyright (c) 2015 Japan Youth Hostels, Inc. all rights reserved.

夕飯を食べると、すでに日が沈んでいた。敷地内の共有スペースで休んでいると、ＹＨのペアレント、高那ヒロコさん（６５）がやってきた。「これ、におってごらん」。ヤコウボク、という名の草らしい。「昼は閉じてるんだけどさ、夜になると花が咲く。夜に、香る、木って書くのさ」。ツン、と鼻をつく。夏のにおいですね、というと、ヒロコさんは笑った。

部屋に戻る。テレビもパソコンもない小さな空間で、電気を消し、僕はタツヤと語り合う。学校の話、家族の話、あるいは人生の話。タツヤは僕に問う。「なあ、これって、旅かな」。僕は答える。「そう、旅。自由やろ？」。タツヤは短く、うん、と答えた。

２日目。僕らは集落を散歩する。ビーチサンダルで地面を踏むたび、じゃり、じゃりと砂の音がする。三線が響き渡り、水牛がのらりくらりと歩いていた。民家の屋根はシーサーが置かれた赤煉瓦、外壁は石が積み上げられて造られている。「最も沖縄らしい沖縄」とも言われ、全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

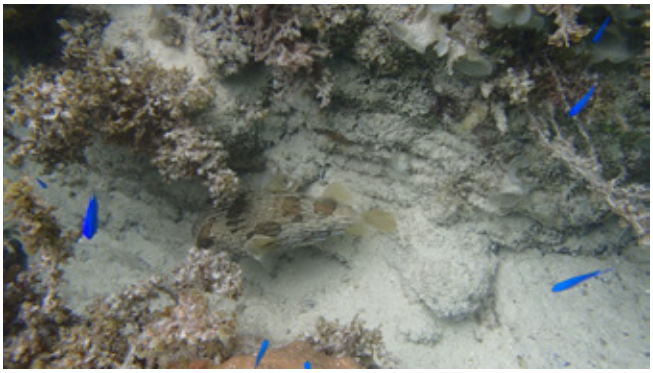
島内で最も高い場所とされる、島中心部の「なごみの塔」へ。８段の階段の傾斜は約６０度。幅は４５センチほどで、すれ違うことさえできない。手すりを脇に抱えるようにして階段を上がる。高さわずか４．５メートル。なのに、３６０度を見渡すことができた。

民家が見える。海が見える。空が見える。ただ、それだけ。それだけなのに、全体の調和が取れていて、美しい。タツヤは、僕のあげた一眼レフカメラのシャッターをひととおり押した後、こう言った。「この景色、目に焼き付けとこ」

竹富島は伝説にあふれている。その一つが集落にある「ンブフル展望台」。小さな丘に、簡易的な展望台が設けられている。銀の看板にはこうある。

「住民が飼っていた牛が夜中に飛びだし、角で土や石を突き上げて一夜のうちに高い丘をつくり、その上でンブフル、ンブフルと鳴いていました」。すぐ近くには、干ばつ時に犬がしっぽをふったことにより見つかったとされる「ナージ井戸」。この島が古くから、動物たちとともにあったことがうかがえる。

１キロほど歩き、コンドイビーチへ。浅瀬の海は透き通っている。タツヤは言葉を失っていた。「きれいやろ」。僕は得意げに言う。はやる気持ちを抑えきれず、２人とも早歩きになる。シュノーケルの用具をつけ、海の中へ。ガイドブックで見た魚たちが、気持ちよさそうに泳いでいた。タテジマキンチャクダイ、ミスジリュウキュウスズメダイ、メガネゴンペ……。何時間泳いでいただろう。僕もタツヤも、時を忘れ、戯れていた



泳ぎ進めていると、一気に海が深くなった。それでも水は透明で、１５メートルほどの海底まで見える。太陽の光が幻想的に注がれる。息を吸い込み、深く、深く潜る。耳が、キーン。それでも、ずっと魚を見ていたかった。

Copyright (c) 2015 Japan Youth Hostels, Inc. all rights reserved.

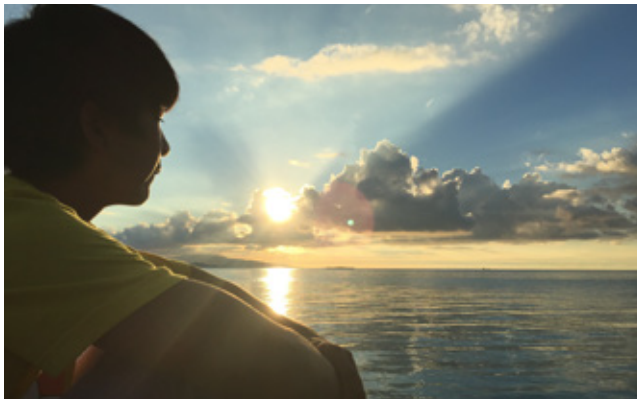
海は続く。砂浜沿いに、僕らは南へとゆく。しばらく泳いでいくと、砂浜で多くの人がしゃがみ、何かを探している。なんだろう。海から上がると、そこは「カイジ浜」と呼ばれる場所だった。みんなが探していたのは、星のかたちをした砂だった。僕らもＹＨで１袋ずつもらっていた。それでも僕とタツヤも、濡れた手のひらに砂を押しつけ、自分たちで探す。「あった！」。タツヤが声をあげる。「すげー、ホンマにあるんや！」。そんなに時間はたっていないのに、体についた海水は、すっかり渇いていた。

ＹＨでシャワーを浴び終わると、従業員の男性から声をかけられた。「ヤシガニ、ミルカイ？」。方言が強くて、ヤシガニなのかミル貝なのかよくわからない。けど、「ヤシガニ、見るかい？」だと理解した。はい、ぜひ！

９０リットルのポリバケツに入っていたヤシガニは、全長が５０センチはありそうなほど大きく、居心地が悪そうに動いていた。環境省のレッドリストで「絶滅危惧Ⅱ種」に指定されていることもあり、「また戻すんさ」と男性は言った。なるほど、こういうふうにして、自然と生物を守っているんだ。

一休みして、午後７時ごろ。僕とタツヤは１０分ほど歩き、国の登録有形文化財「西桟橋」へ向かった。夕日がきれい、とペアレントのヒロコさんに話を教えてもらっていた。竹富島から石垣島への船の最終便は午後６時１５分。つまり、泊まらなければ夕日は見られない。ちょっとした優越感が、足取りを軽くする。

橋は１００メートル超あり、海にのびている。その向こう側には西表島。そして彼方に、夕景が広がっていた。沈みゆく太陽がまばゆい。小さな女の子が、海に足をつけながら、ぼんやりと見とれている。女の子の左手をぎゅっとつかんだ母親が、その様子を見守っている。一枚の絵画のようだった。



ソーキそばを食べ、ＹＨに戻る。僕らはこの美しい島のことがもっと知りたくなって、ヒロコさんに話を聞く。なぜ砂が星のかたちをしているのか、シーサーがくわえている風車にはどんな意味があるのか。一つひとつが新鮮で、タツヤも必死にメモをとっていた。

あることばを教えてくれた。「かしくさや　うつぐみどぅ　まさる」。難しくて、何度も聞き返して、すっかり覚えてしまった。

かしくさや　うつぐみどぅ　まさる

どんな意味だろう。「みんなで協力して、助け合っていくのが、賢いってこと。だからね、みーんな、『うつぐみの精神』を持ってるのさ」。早朝から掃除をして島の美しさを守り、生物や自然を尊いものとみなし、人とのふれ合いを大切にする。当たり前だった日本の風景が、この小さな島に残っているのだと、そう感じた。

最終日。石垣島に戻る僕らを、ヒロコさんが見送ってくれた。ＹＨの前で、タツヤに声をかけてくれる。「今度は１人でおいでね」。タツヤは小さくうなずき、「うん」と言った。今度は力強く。姉のケイコさんが港まで車を出してくれる。５分ほどの帰り道、僕は牛をながめながら、「またこよう」と誓った。おそらくはタツヤも、同じ思いだったろう。

港に着く。船への道のりを、僕らはゆっくりと歩いた。イチ、ニ、サン、ヨン。そこまで数えて振り返った。ケイコさんが手を振っている。空が、どこまでも青かった。

ユースホステル高那旅館
〒907-1101 沖縄県八重山郡竹富町字竹富 499
tel.0980-85-2151 / fax.0980-85-2129
http://www.kit.hi-ho.ne.jp/hayasaka-my/new_page_5.htm

筆者＝藤原学思（ふじわら・がくし）
1986 年生まれ。朝日新聞東京社会部記者。
6 月には朝日新聞 GLOBE の企画「旅を旅する」でヨーロッパ横断の旅をした。
http://globe.asahi.com/feature/2015071600008.html

Copyright (c) 2015 Japan Youth Hostels, Inc. all rights reserved.